

えでぴあ

立川と語ろう 立川に生きよう

November 2020

Écoutez Bien Vol.37 No.428

11

コロナ禍に定点撮影から見えるもの



新・砂川深層 ②

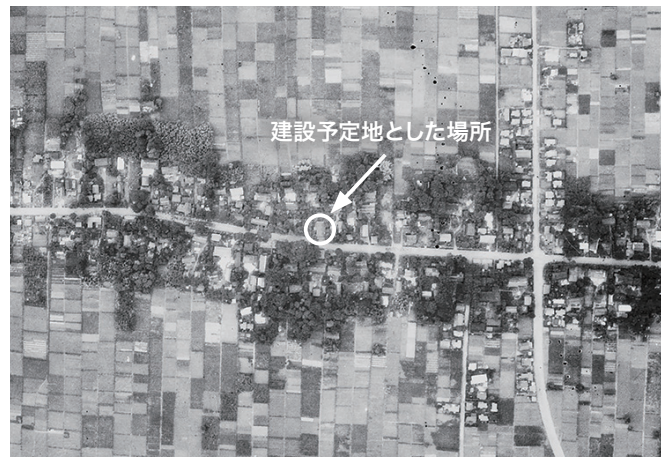
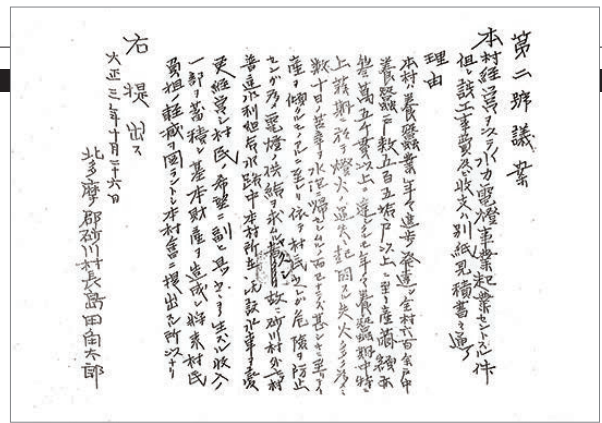
まぼろしの 砂川村営発電所計画

案内人：豊泉喜一氏

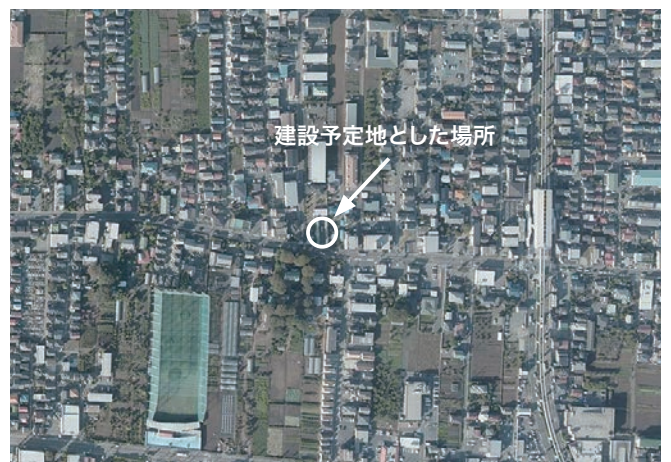
今から100年ほど前、当時は未だ村だった現立川市に電灯が灯ったのは、大正4年(1915)6月、砂川村にはそれから2年後の大正6年5月に文明の灯りがともりました。この電力は京王電軌が運営する電灯会社で当時北多摩地域はこの会社のエリアでした。

砂川村は大正の初めから電灯事業創設委員会を設置して、村営発電所を作る計画が進められ、大正3年4月には群馬県伊香保町に発電所建設につき視察調査を行い、この年の秋10月26日村議会に、村営発電所計画が提出されました。計画の提案理由に「本村ハ養蚕事業年々進歩発展全村六百余戸中養蚕戸数五百五十戸以上に至り蚕繭額又参萬五千貫以上ニ達シタルモ年々養蚕期中特ニ上簇期ニ於テ燈火ニ起因スル過失ニ依ル失火多ク為ニ数十日ノ辛苦ヲ水泡ニ帰セシムル而已ナラズ甚シキニ至リテハ産ヲ傾クルモノアルニ至レリ依テ村民之レガ危険ヲ防止センガ為電灯ノ供給ヲ求ルヤ久シ故ニ本村既設水車ヲ利用水力電灯ヲ供給セントシ…以下略」との理由により村営発電所を建設する。費用は村債と繰入金で12万円、これで25馬力の発電機を設置、およそ千灯分の電灯が供給出来、約10年で借入金の返済が出来るという計画で、この日村議会で議決されました。

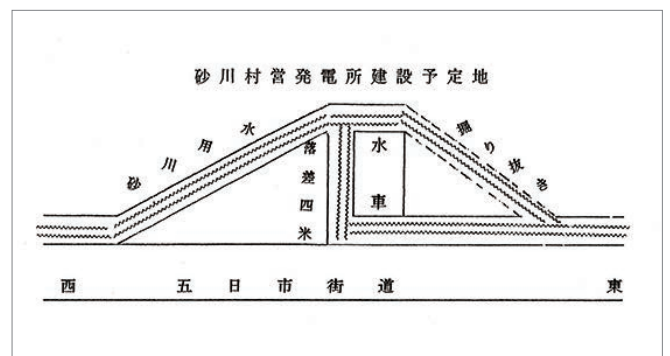
ところで、平坦地で特に大きな川もない砂川の、どこに水力発電所など作る場所があるのか不思議に思われる方がいると思いますが、その場所は私の家の東隣、現在トランクルームが置いてある場所です。この時代ここには砂川用水を利用した大きな水車があり、ここの水利を利用して発電所を作ろうとしたのです。この時期、明治の初めに計画された玉川上水通船計画により、上水南側の全分水の水が砂川用水に集められていて水量が多く、建設予定地の場所は4メートルほどの落差があり、その落差を利用して発電所を作る計画でした。現在この場所を見て、とても水力発電所を作るような場所とは思えませんが、当時村では全村に供給できるとして計画したようです。しかしこの頃大手の電灯会社が、周辺の村々に供給が始まり、発電所が計画された3年後には砂川村にもこの電灯が入り、結局砂川村村営発電所計画は実現せずに幻に終わりました。



建設予定地周辺(昭和22年) 水車稼働中 出典：国土地理院空中写真



建設予定地周辺(令和1年) 水車撤去後 出典：国土地理院空中写真



砂川村営発電所建設予定地(現：柏町3丁目24番地)

通ってきたから言える「大丈夫」

してあげるではなく、させて頂いている

誰もが苦しみ耐えるコロナ禍。本当の弱者とは誰なのか。

小さな声や不安は誰が聞き、誰が癒すのか。

当事者だから発することができる言葉で語ってもらった。

——「立川みらい」はNPOではないのですか。

篠原 はい。私が代表を引き継いだ時、行政や社協の方でさえ、そう思っていた方もいました。私たちは昭和34年創立の、当事者の小さな団体です。ひとりで子育てしていく苦労は今も昔も変わらない。今の方が、苦労が多いように思えます。

——「立川マザーズ」から「立川みらい」に改名したのは最近ですね。

篠原 「立川マザーズ」で検索すると、イタリアンのマザーズと東証マザーズしか出てこないの。秘密結社のような会でしたが私が副会長になる時に、立川市の誰かと関わりを持ちたいと思ってSNSで繋がりを作り、そこから多くの方と知り合うことができました。

——ご自身のことを教えていただけますか？

篠原 25年前に立川にご縁を頂きました。それ以前はDVの嵐の真っただ中で私の人格は壊れていました。ある日殴られ蹴られ馬乗りになって首を絞められ、肋骨が折れて頸椎打撲、奥歯が無くなって、トラックに轢かれたの？という状態になりました。意識がなかったのを息子に「お母さんお母さん」と揺り動かされ、お隣の方に救急車を呼んでもらい病院に運ばれました。が、当時は民事不介入で、家庭内のことに警察は立ち入らない。病院ももめ事を恐れて、点滴が終わった時点で帰されてしまった。夫も殺すつもりで殴っていましたから私が家を出ていくことは想定内だったらしく、市役所にひとり親の申請をして引っ越すことも止めませんでした。

——よかったですねえ。

篠原 ところが、引っ越し当日、自分も入居すると言って一緒に来てしまったんです。そこからは元の生活と同じです。でも離婚していますから殴れない。そうなるひとすら恫喝です。夫が寝ている時に物音を立てると怒られるので、子どもと小さくなって台所で暮らしていました。そんな生活が2ヵ月くらい経ったある日、息子が

「お母さん、逃げよう」と言い出したのです。血まみれのリビング、殴られるお母さん、そんな修羅場を何度となく見てきていますから、息子は大きくなるまで父親に対する憎悪が消えず、「あいつなんか殺してやる」というのが口癖でした。20歳になった時には、戸籍謄本から追跡できないように勝手に手続きしてきました。

——逃げられたんですか。

篠原 ええ。子どもの言葉に押されて、2日くらい東京の友達の家に行こうと小さなボストンバックと子どものおもちゃリュックをもって、国分寺まで来ました。友達の家に着いたら「空気が吸える」という感覚になって、今まで呼吸すら我慢していたと気づき、そうならもう戻れなくなってしまうのです。夫は私が家に残してきた手帳などから行き先を突き止め、友達の家で電話をジャンジャンかけてくるようになりました。すると今度は友達が恐怖にさらされるようになり、表札をしまい、洗濯を外に干せなくなり…。ご主人が国分寺市役所に相談に行って、そこからシェルターへという流れですね。

——大変でしたね。お友達も大変でした。

篠原 シェルターに入ったその日、今まで泣いたことのない息子が声を出してワンワン泣いて。そんな息子を抱いているうちに私も泣いてしまっ。そこからでした。自分の置かれている環境をはっきり認識し、ひと月後に立川市に部屋を決め息子を保育園に預け、仕事を探す日々になりました。

——今でも離婚された元ご主人の影におびえることがあるそうですね。

篠原 はい。昔は個人情報と言いながら簡単に住所や連絡先が漏れることがあって、怖かったです。今も顔をさらすのは怖いです。

——「立川みらい」には同じような被害者がいらっしやるのですか。

篠原 被害者も、加害者もです。

——加害者も？

篠原 そうなんです。今までお付き合いした女性を全部殴ってきたと言う男性なんですが、奥さんは誰かに必要とされることに価値を見出して結婚してしまった。子どもを2人もうけて何とか頑張ってきたのですが、夫の怒りをコントロールできなくて、上の子を引き取って離婚されたんです。

——下のお子さんは、お父さんが引き取ったのですか？

篠原 そうなんです。で、この会を見つけて会員になった。会長として、会員さん全員お目にかかるというスタンスでやってきているので、まさかDVの加害者だとは知らずに、普通のお父さんと思って話していたんです。ところが実は加害者だとわかり、私の夫と同じように背が高く、感情が高ぶると「パンパン」と机を叩く。忘れていた過去がフラッシュバックして、ものすごくドキドキしました。でもその方もご自身なりに人生を変えたいと懸命に子育てをしているので、その父子さんが、少しでも笑顔で過ごせるようにと関わっています。

——会員さんは何世帯いらっしやるのですか？

篠原 約80世帯です。それでも会員を精査して、既にお子さんが自立して必要とされない方やLINE既読だけの方には、会費を払って下さっている方との公正さを考えてご遠慮頂きました。

——会費っていくらなんですか？

篠原 年間1200円です。それでも払えない人は払えないんです。払えない時の辛さはわかるので、事情がわかっている方は猶予したりします。でも皆さん、明るいですよ。「うちはお金ない時はお菓子パーティなの」と言っていて、会社でもらったお菓子を貯めておいて、お皿に折り紙を飾り切りさせてパーティに見立ててしまおうか。前向きな楽しい貧乏の知恵をお互いに出し合って、「辛いね、苦しいね」から「頑張ってるね、自分も頑張ろう」に変えていけるんです。

——そういった知恵を出し合う機会があるのですか。

篠原 あります。毎月第3土曜日に子ども未来センターでおしゃべりCaféをやっているんです。子ども家庭支援センターと共催です。

——会として、他にはどんなことをされているのですか。

篠原 今年はコロナ禍で活動がほとんどできないんです。1年に1回、総会を兼ねたBBQをやっているのですが、それもできていません。BBQは子どもたちがとても喜んで楽しみにしていることなんです。夏にはお泊り。手当て支給日の翌日くらいに設定して安い宿舎にみんなで行くのですが、それもできていません。

——何をやるにもお金がかかりますね。

篠原 そうなんです。市の助成金がある程度頂いていますが、500円のBBQも参加できないという人もいます。コロナで仕事を失った人もいますから、そういう人のために負担を軽くしてあげたいと思うのですが、会も今はコロナ禍で何もできません。秋には築市でお店を出して資金を集めたりしていたのですが、フードバンクさんからいただいた食品を配布したり、助成金で購入したお米券を配ったりに留まっています。コロナが収まるまでは、こうした命をつなぐところにご寄付とかご支援を頂けるとありがたいです。

——欲しいものが届くとは限らないですよね。

篠原 そうなんです。ですから、本当は現金がありがたいんです。お米買ったりパスタ買ったりできますから。今年は緊急支援ということで助成金を頂けているんです。ソロプチミストさんや個人でくださった方もいらして、その段階で春にまず全世帯に食品配布ができました。お米だけは5kgずつ入れて、それ以外に役に立つようなものを見繕って入れるんです。その後に長友祐都さんからフローレンスの基金にまとまった金額を頂戴して、それも全部食品を購入しました。

——子どもには、何と言っても食品ですよ。

篠原 おなか为空くと不安でならない。米櫃が空になっている時の気持ちって、本当に情けないじゃないですか。離婚をして子どもの人生を変えてしまった引け目とか負い目が親にはあって、そこにきて飢えさせてどうする？と、ほんとに辛いですよね。

——離婚して生活水準を下げないようにしようと思うと、ものすごく頑張らなきゃならない。

篠原 ひとり親の家庭環境もいろいろです。孤立無援の方もいれば、親と同居している方もいる。同居しているからと安泰な訳でもない。実家での親子関係が良好とばかりではないし、介護を抱えている場合もあります。経済的に安定しているように見えても、隣の芝生で実情はわからないですよ。本当に、当事者でなければ分からないことは、山盛りあります。基本その人の立場にならなければ分からないことはあるのだから、情報だけで判断したくないと思います。でもみんな困っても困っていると言ってこないですよ。だから家族環境を把握しておかないと。困っていそうだなと思ったらこちらから手を差し伸べていかないといけないです。自分の通ってきた経験から「ここは大丈夫だよ」と、その「大丈夫」を言ってあげられるのが私の強みだと思うんです。

——うかがったところでは、両膝に人工関節が入っているそうですね。

篠原 そうなんです。股関節も。それに何年も救急に運ばれていたのを、忙しさにかまけて放置していたら、とうとう胆嚢も壊死しかけて3月に緊急で取りました。

——満身創痍ですね。

篠原 うつ病で15年近く通院していたこともあります。激しいDVと抑圧で、希死念慮が強く、発病時に措置入院になるところでした。でも、母子家庭で措置入院となったら、当時の考えでは、子どもたちは施設で生きることになる。絶対通院治療をすると約束するしかなく、そん

な状態でも子どもの行く末を案ずることができたのは、今になると正しいかどうかは別として、親としての執念だったのかもしれませんが。死にたいよりも、消滅したいという気持ちがとても強くて、リストカット、出ている腕や太ももを刃物で切っていました。自分を刻んでいる時の記憶は無いんです。強い薬が本当にたくさんあって、そのおかげで生きていたというか。息子が小学校に行く時、血で汚れた手首を見て傷の手当をして登校してたのは記憶にあります。シェルターに来た時もゼロからの出発でしたが、私は幼少期の育ちもいろいろあって、若い時にもゼロからの出発を何回か経験していたので、人生はいつりセットされるかわからないと思っています。

——何が支えなのですか。

篠原 今自分を支えているといえ、逆にこの会ででしょうか。自分にとってやることがあるというのがありがたい。虫けらのような人生を送っていた私が、人のために動いている。してあげているのではなくて、させて頂いていると思います。会員さん達と関われなかったらそれこそ孤独だったかも知れません。私、友達、片手も居ませんもん(笑)。

——息子さんもお立派ですね。

篠原 はい。息子は戦友です。本当に感謝しています。

篠原輝美さん

立川市ひとり親家庭福祉会 立川みらい 会長。離婚後地方から立川へ。当時保育園に通っていた息子が31歳になり結婚して独立した。DVやシェルターでの保護を経て、ひとり親で子ども2人を育ててきた。ひとり親の苦労を知っているだけに、孤立するひとり親世帯の力になりたいと「立川みらい」の活動に参加。8年前から会長を務めている。地域で安心して子どもを育ていけるように、お父さんお母さん子どもたちも、みんなが笑顔になれるようにと願っている。現在は近郊市の女性相談員。



コロナに負けるな、立川!

緊急事態宣言から解除、そして今

定点撮影から見えるものはなんだろう。
ホテルも百貨店も飲食店も小売店も、お父さんもお母さんも子どもたちも、みんなみんな忍耐しつづけた。
Go toがもたらすものは何なのか。いままでの忍耐を裏切らないものであってほしい。

10月6日の段階で、立川市の感染者累計は122人、入院・療養中が14人との発表。交通の要衝で、JR立川駅には毎日約16万人以上の人が乗降する。吉祥寺や八王子を抜いて、中央線区間では新宿の次に多い。その立川市が武蔵野市よりも八王子市よりも感染者累計が少ないのは、ということだろう。えくてびあんが行ってきた定点撮影にその何かが見えているだろうか。

緊急事態宣言発令翌日(4月8日) 3人 (の中は感染者累計) 4月8日撮影



緊急事態発令中



5月21日 14



5月23日

緊急事態解除後



5月27日 14



5月30日



6月9日



6月13日



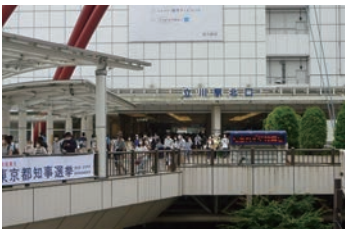
6月3日



6月6日 15



6月17日 16



6月23日 17

緊急事態解除

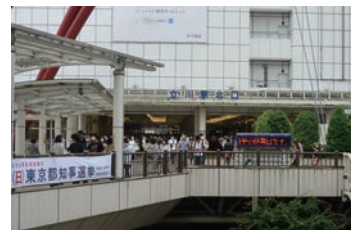


5月25日 14

雨ばかりの7月、でも夏休み



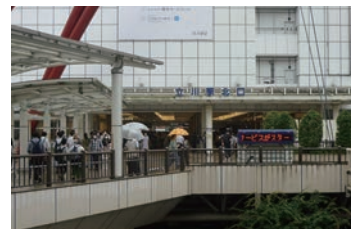
7月1日 20



7月4日



7月12日 31

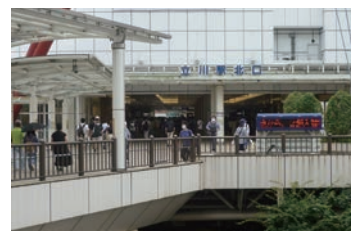


7月25日 49



7月19日 GREEN SPRINGS (7月に晴れた日は2日だけ)

やっと夏らしくなった8月



8月1日 58



8月5日 69



8月15日 88



8月29日 97

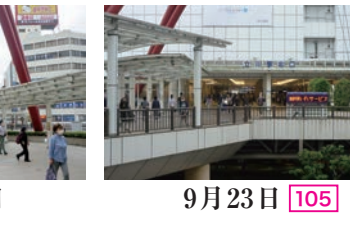
秋の風が吹き始めた9月



9月2日 99



9月9日 102



9月23日 105



10月6日

10月6日 122人

キングオブ 駄菓子屋



the SOUND of Oldies in TACHIKAWA COLLECTION

現在は真如苑さんの慧燈院が建つ一角に、駄菓子屋があった。元は釣具店だったのか「つり」という看板が掛かっていた。同級生がお店のおじさんに店の名前を尋ねたら、「なんでも売っているから何でも屋」と答えた。以来誰もが「何でも屋」と呼ぶようになった。富士見町の子どもは「何でも屋」を縮めて「デモ屋」と呼び、地元柴崎町の子どもは苗字である「みやうち」と呼んでいた。

「デモ屋」は佇まいからして普通の駄菓子屋ではなかった。アングラ感満載で、諏訪神社のお祭りに来るお化け屋敷の中に入っていくような怪しさがあった。釣具が入っていたのであろう木の箱に、多種多様な駄玩具が飾られ店内にズラッと並んでいる。その怪しさに子どもたちは魅了されるのだ。まさに「キングオブ駄菓子屋」だった。オレは怪獣のブロマイドを集めていた。1枚5円で、カテゴリー分けしてある中からピッと1枚抜きだすと、ざら紙の袋に入った怪獣のブロマイドが出てくる。俺はそれを買うのが大好きで山ほど持っていた。小学校中学年になったら母親から「いい加減に捨てなさい」と言われ仕方なく、庭の焼却炉に番町血屋敷よろしく「1枚、2枚」と投げ込んだ。結果的に998枚あった。今思えば実にもったいないコレクションだった。どういうわけか同時期に買っていた使用済み切手のコレクションは今も残っている。

親父は駄菓子屋で買い物をするのを嫌ったので、オレが買い物するときはいつも弟を見張りに立たせていた。ある日、首尾よく買い物をして家に帰り、家でお菓子を広げてニッキ飴を食べていたら、弟が「にいちゃん、おとうが帰ってきた!」と叫んだ。慌てて舐めていたニッキ飴を隠すために噛んだら奥の銀歯にくっついてしまい、力ずくで抜いたら、飴に銀歯がくっついて出てきてしまった、トホホ…

語り：鈴木 武 氏（立川印刷所社長）